

緩み母音と中央化

著者	近藤 清兄
雑誌名	東北大学言語学論集
号	22
ページ	29-52
発行年	2013-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130083

緩み母音と中央化

近藤清兄

キーワード：lax 母音体系 調音音声学 カクチケル語 mid-centralized

はじめに

『東北大学言語学論集』の前号(第 21 号)に掲載された、グアテマラのマヤ系言語「カクチケル語」の母音体系についての記述は筆者の興味を強く惹いた。その「標準語」のモデルとなる変種はその母音体系において「張母音」(<a><i><u><e><o>)と「緩母音」(<ä><ï><ü><ë><ö>)を5個ずつ持つ、という。[※1][※2][※3]

「緩み母音」と聞いてわれわれがまず思い浮かべるのはゲルマン語の母音の目録の中に(Checked vowelsの一部として)見られるそれらであろう。

だが、そもそも、「緩み」母音とは何なのであろうか。それはどのように記述され、説明されているだろうか。

こころみに手近な一般向け英語辞書で lax の項を引いてみよう。

lax ... 2 (*phonetics*) (*of a speech sound*) produced
with the muscles of the speech organs relaxed

とある(*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 7th edition, 2005)。では lax(緩み)とは、音色や、あるいは suprasegmental なものの違いでしかないのであろうか?

実はそうではない。以下本稿においてわれわれが見るように、「緩み」は、「母音三角形」の上に投影されうるものなのである。

すなわち、調音点(高低つまり狭広、及び前後)の違い、舌の位置の違いとして現れるのである。

思うに、「母音三角形」の「辺」ぎりぎりにあるものは、「高い」(=狭い)とか「前寄り」といった特徴において、口腔の限度一杯という意味において「緊張している」と見なされるのではないか。「緩んでいる」というのは、「三角形」の図で言えば、典型的な母音(基幹母音がそれにあたる。後に述べるようにシュヴァは[よく見かけるありふれた母音ではあるが]ここにいう「典型」の内に入らない)よりも「内側」に入り込んでいる位置にあるということであろう。つまりは、たとえば前寄り高母音なのに上がりきっていなかったり、前に寄り切っていなかったりするものなのであろう。

音声教育の観点からいっても、「筋肉を弛緩させろ」などといって教えるのは困難であるが、(まさにその結果として表れる)「母音三角形の辺の内側に引っ込んだ位置(中央に寄った位置)」として投影されたものを示すことは容易であり、その意味で教育上もこの視点は有益であるといえる。

「緩み」については音声学教育の現場では、誤解を恐れずに言えば深入りが避けられて

いると言ってよいと筆者は思う。本稿を草する目的はまさにその「深入り」を調音音声学的観点からしてみることにある。

1.「緩み母音」に関する諸説

(1) 田中春美『現代言語学辞典』

lax《弛緩性》…緊張性(TENSE)の音に比べると、舌の緊張度が弱く、短かく、不明瞭度が強い音を指す。調音点が近くて似た音がある場合、二つの別の音に分けるのに役立つ。…母音の中で中央に近い母音がこの特徴をもつ。

ここでは「中央寄り」ということが注意されている。

(2) 『ラルース言語学用語辞典』

ゆるみ 仏 *laxité*/英 *laxity* …発声器官が休息の位置に対してわずかなずれしか示さないという形で現れる。

これだけでは一見意味がわからないのであるが、言わんとしていることは「緊張した音ならばデフォルトの位置[シュヴァの位置がそれだと、仮にしてみる]から[母音三角形の枠いっぱい]大きく舌の位置がずれるものであるはずだ」ということであろう。[※ 4]

(3) 日本音聲學會編(1976)『音聲學大辞典』三修社

「張り母音(tense vowel)」の項(p.664)

…定義 舌筋が緊張する母音のことをいう。…例示 [i:, a:, ɔ:, u:, ɔ:]等は、その長短にかかわらず、その調音の構えの個性が、例えば他の[ɪ, e, æ, ʌ, ɒ, ʊ]と根本的に違って、舌筋に弛張の差があり、舌幅の広狭を異にするというのである。Palmer の呼気法からすると、前者は声門の自由流出で、後者は意識的開閉というのである。

ここでも「緩み母音」は checked vowels と同一視されている。また、呼気の流出様式に実際に違いがあったとして、それは調音点の問題として扱うことのできないようなことなのであろうか。

(4) 『言語学大辞典』第6巻術語編

「はり tense」の項(p.1074)…筋肉の緊張などこの区別のもととなる生理的現象に関しては、それを支持する確実な実験結果は得られないという批判もなされている…

…この問題はいまだに未解決であるというほかはない。…音声学上は伝統的な記述方法(すなわち舌の位置)によっても一応記述できるのであり、「はり」と「ゆるみ」がそれ以上に音声学的に本質的なものであるかは、より確実な実験的証拠が得られるかどうかにかかっている。

「音声学上は伝統的な記述方法(すなわち舌の位置)によっても一応記述できる」—これをもって「張り/緩み」を説明しようとする立場を「舌の位置説」とでも仮に呼ぶとすれ

ば、本稿の読者は、筆者もまたこれに与することになるのを見ることになるであろう。

(5) 城生佰太郎ら『音声学基本事典』

…典型的には、舌や筋肉の緊張度により区別され、緊張を伴う母音は緊張母音 (*tense vowel*) と呼ばれる。一方、舌や唇が緩んだ状態で発音される母音は、弛緩母音 (*lax vowel*) と呼ばれる。両母音は、相対的な舌の位置の違いに基づいて区別することができる。すなわち、舌の高さに関して、同じ領域内にある母音の内、より高く、より周辺の位置で発せられるものが緊張母音、より低く、より中央寄りの位置で発せられるものが弛緩母音に相当する。(p.429「緊張母音/弛緩母音」の項)

「同じ領域内にある」の文言は問題となる。[i] と [ɪ] を見比べた場合、なるほど [i] は「より高く」「より周辺の位置で」発せられ、[ɪ] は「より低く」「より中央寄りの位置で」発せられる。しかし、[e] と [ɪ]、[e] と [ɛ] ならばどうか? [i] と [ɪ] が「同じ領域内」にあるとして、[e] と [ɪ] はどうなのか? [e] と [ɪ] では「中央寄り」でない [e] は [ɪ] よりも低いのは珍しくないのではないか。[i] と [ɪ] は高さも前後の位置も異なりながら「同じ領域」にあり、[e] と [ɪ] はそうでないとするなら、その根拠は何であるのか。[e] と [ɛ] の場合も、[ɛ] は「中央寄り」ではあるが高さは変わらない。

[ɛ] と [ɛ̃] では、[ɛ]の方がむしろ低い。これが「同じ領域内」にないというのであるなら、[ɛ] と [ɛ̃] の高さの差は、[i] と [ɪ] の間のそれに比べてどれほど大きいと言い得るであろうか。「同じ領域内」というのは、「高さ」を問題にしたときに「緊張」と「弛緩」の([i] と [ɪ]、[u] と [ʊ] にみられる)関係が、たとえば [ɛ] と [ɪ] では崩れてしまうために言及したのであると思われるが、筆者にはこの条件が「緊張と弛緩」を記述するのに必須だとは思われない。参照されている「母音三角形の枠いっぱいの」母音に対して「中央寄りである」ものが「弛緩母音」であるとすれば十分であるように思う。だとすれば、「緊張母音」が「緊張している母音」であることをいう必要さえないであろう。「弛緩母音」とは「中央に寄った母音」であるとすればよいのである。「舌や筋肉の緊張」という生理的現象と対応させる意図から、「緊張母音」に(デフォルトの、無標の母音であればよいところ)「緊張」という積極的特徴を担わせているのであらうと思われる。

結局、「高さ」は本質的であるとは思われない。「中央寄り」であることこそが「弛緩母音」の本質であるように筆者には思われる。

実は、[i] と [ɪ] が「同じ領域内にある」という表現は、[i] から出発して [ɪ] を構成する、という構成の手順からこれをみるときに大いに意味をなす。第9節「緩み母音の構成ドリルについて」参照。

(6) Gimson

◆ A.C.Gimson/竹林滋訳(1983):『ギムスン英語音声学入門』(金星堂)

… RP の短母音 /ɪ/ が発音される際には、前舌よりも中舌に近い部分が半狭よりわずかに高い位置まで持ち上げられる。唇は弱い張唇で、舌は (/i:/ の場合の緊張に比べ)

弛緩しており、舌の側縁は上の臼歯に軽く接触している。音質は中舌寄りの C[e]、すなわち[ɛ̞]の音質である。/ɪ/は語のどのような位置にも現われる。(p.116)

「半狭よりわずかに高い位置」、つまり狭めの[e]よりもわずかに狭い位置という意味。「中舌寄りの C[e]、すなわち[ɛ̞]の音質」、これは「[e](よりもわずかに狭い)ぐらいの高さで中舌寄り(少し後ろに引かれている)」という意味である。

… RP の短母音/u/が発音される際には、後舌面よりも中央に近い部分が半狭の位置よりほんのわずかに上まで持ち上げられる。従ってこの音は前舌母音の/i/とちょうど前後の対照をなしていることになる。舌は(より緊張した/u:/に比べ)弛緩しており、上の臼歯との強い接触は生じない。唇の円めは狭いが弛緩している。音質は中舌寄りの C[o]すなわち[ɔ̞]である。この母音はアクセントのある音節にもない音節にも現われる。…(p.136)

ここでも/i/のことを[ɛ̞]と表現したのと同様に、狭めの[o]よりも「ほんのわずかに上」つまり、狭い、と記述されている。そして中舌寄り(少し前方へ出ている)であることがわかり、[ɔ̞]と表現されている。もちろんこの[ɔ̞]という記号は[ø]のことではなく、狭い[o]が前進した[o̞]という意味である。

(7) Ladefoged

◆ピーター・ラディフォギッド/竹林滋・牧野武彦訳(1999):『音声学概説』(大修館書店)

…これらの音[beat, bit]の[i, ɪ]、[bait, bet]の[e ɪ, ɛ]、[boot, foot]の[u, ʊ]のそれぞれで、弛緩母音の方が対応する緊張母音よりも短く、低く、わずかに中舌寄りである。(pp.106-107)

「低く」「わずかに中舌寄り」と指摘されている。

…緊張(tense)・弛緩(lax)という用語…は音韻的に決定された母音の組を決定するのにとっておくのがよい。[舌根前進(Advanced Tongue Root, ATR+)という(緊張母音[i:] [u:]に強くあって[ɪ] [ʊ]に弱い—同書 pp.274-275 —)舌の構えの違いと結びつけるのがうまくいかないことがあるからの意—引用者]こうすれば、開音節に現れ得る英語の母音は緊張母音、英語の母音の中で[ʊ]の前に現れ得るものを弛緩母音と呼ぶことができる。(p.275)

要するにラディフォギッドは「弛緩母音」を closed (checked) vowels と同一視している。

…これらの用語[緊張(tense)・弛緩(lax)という用語]は、実際は英語において異なる振る舞いをする2つのグループの母音を区別するための分類名称にすぎない。グループ間には音声的な違いがあるのだが、それは単なる「緊張度」というものでは

ない。2つの組の間の違いはそれが起こりうる音節の種類という観点から論じることができる。(pp.105-106)

ラディフォギッドは(生理的な)「緩み」というものは「ない」と考えているといつてよい。(「それは単なる「緊張度」というものではない」というが、ではどんな緊張なのかというと、結局よくわからない)そして[i][u]を[ɪ][æ][ʌ][ʊ]と同じ仲間とみるので、[ɛ]や[æ]までも「弛緩母音」に含めようとする(p.106の表では実際にそうになっている)。それがためにATR+/-で説明できなくなっている。

(8) Roach

- ◆ ピーター・ローチ/島岡 丘、三浦 弘訳(1996):『英語音声学・音韻論』(大修館書店)
…研究者(特にアメリカの研究者)の中には、長母音と二重母音を張り母音(tense)と、短母音を弛緩母音(lax)と呼ぶ者もいる。…(p.21)

ここでも open と checked のことを tense, lax と呼ぶ人がある(にすぎない)、と言っている。

(9) 竹林滋・斎藤弘子『新装版 英語音声学入門』

3.3.2.2 日本語の/i/が基本母音の[i]に近いのに対して、英語の/i/つまり[ɛ̃]はむしろ基本母音の[e]に近く更にそれより後寄りであることに注意すべきである。日本人には英語の[i]が「イ」と「エ」の中間に聞こえることが多く、six を sex、pit を pet と聞き間違えることがある。また英語の/i/の舌の位置は後寄りのため完全な前舌母音である日本語の/i/ほど明るい音色を持たず、あいまいな響きを伴う。(p.21)

「英語の/i/つまり[ɛ̃]」と言っているのは、上でみたギムスンの説明と同じ意味で、「[e]ぐらいの高さ(つまり[i]よりも少し低い)で、中舌寄り(つまり少し後ろに引かれている)」ということである。

(10) 今井邦彦『ファンダメンタル音声学』

[[i]について]この音の舌の位置は[i:]や日本語の「イ」よりも低く、かつ少し内寄りである(p.5)。

この文献も「低く」(□)かつ「少し内寄り」(□^x)と指摘している。細かくいうと「低く」(□)かつ少し中舌寄り(□^f)、すなわち内寄り(□^x)ということであろう。

以上を整理すると、

(イ)「発声器官(speech organs)」が何らかの形で実際に「緊張/弛緩」するような生理的現象があると考えており、それがこの問題の本質であるとみる説。「器官説」あるいは「生理説」と呼ぶことにしよう。しかし、具体的にどこにある何が「緊張/弛緩」という

のであるか、実は必ずしも判然としない。

(ロ)Tense/lax とは、実際に何かが緊張/弛緩するというより、音節の構造の中での母音音素の役割と挙動によって便宜的にそう呼ばれるに過ぎないと、すなわち、open/checked の別名であると割り切り見なす立場。米国の英語学者に多く見られるという。この説の問題点は二つ。一つは、英語などのゲルマン語以外には適用できないこと。二つ、ATR+などの特徴のある母音([ɪ][ʏ][ʊ])とそうでないもの([a][ɛ][æ][ɔ])などを checked としてまとめてしまうために、母音三角形の「縁」に位置するものまでも「緩み母音」と呼んでしまうことによって、「緩み」という言葉に実体が宿らなくなり、意味不明になっていること。「緩み」(という生理的・調音音声学的実体)は「ない」と見なす説であるとも言える。

(ハ)「張り/緩み」とは、「舌の位置」によって、すなわち、母音三角形上に投影される母音の座標(前後、高低)によって、十全に説明しうるものであると見なす立場。「発声器官」の「緊張/弛緩」は、それがあっても、母音のしかるべき「位置」を決める過程で自然に起こることであると考え、特段変わった現象だとは見なさない。後に見るように筆者はこの立場をとる。

多くの音声学書が指摘しているのは、[ɪ][ʊ]がそれぞれ[i][u]よりもやや低く、中舌寄り([ɪ]の場合は少し後寄り、[ʊ]の場合は少し前寄りになること)であるという点、すなわち、「母音三角形」上では三角形の外縁から内部に入り込んだ位置にあるということである。これは次節でみることになる「中央化」(Mid-centralizing)に合致する特徴である。一方、checked vowel に属するその他の母音、[ɛ][æ][ʌ][ɔ]はそうした特徴を持たない(英語の[ʌ]は、しかし、第2次基幹母音のそれ一広めの o[ɔ]から唇の丸めを除いたもの一とは少し違ったものかもしれない。注20参照)。

2. 中舌化(Centralizing)と「中央化」(Mid-centralizing)

Mid-centralizing についてはジャン＝ルイ・デュシェ『音韻論』の日本語訳では「中段中舌化」と訳しており(p.47)、ラディフォギッド/竹林・牧野訳『音声学概説』では「中中舌寄り」[※5]としている。ここでは本文タイトルにおいてすでにそうしたように、「中央化」と呼ぶことにする。

2-1.Mid vs. Central(中舌)

まず用語のおさらいをしておくことにする。音声学用語で mid とは open(広=低)と close(狭=高)の中間のことであり、central とは front(前舌)と back(後舌)の中間のことをいう。

通常の英語の語義では、mid は何かを半分に分ける辺りを言い、center は円や球の中心部付近を指すもののごとくであるが、ここでは specialize された用語であるのでそうした意義はひとまず忘れておいていただきたい。

2-2.IPA 表の例示について

1996年(1993年改訂版、1996年最新版)までのIPAの表では、Mid-centralizing の例として

[e̞]が挙げられていた。しかしこれは[e̞]と、すなわち Centralize された[e]（事実上[a]と同じことである）と区別がつくのであろうか、と筆者は年来疑問に感じてきた。Centralizing と Mid-centralizing に意味のある違いがあるとすれば、それは何であるべきなのであろうか？

実は IPA は 2005 年までのいつかに[※ 6]、Mid-centralizing の例を[e̞]から[e̝]に替えて現在に至っている。これは何を意味するのであろうか。

考えてみれば Centralizing $\overset{\cdot\cdot}{\square}$ というのは、前寄り母音は後ろに引き(\square)、後寄り母音は前進させる(\square)、つまり「中舌化」、ということではしかない。だが Mid-centralizing というのは、中心(そこには「前でなく後でない、高くなく低くない」[e̞]が—その定義により、「漠然と」—鎮座している)に向かって寄せられていくことのように思える。単に中舌化するだけでなく、高い母音は下げ(\square)、低い母音は上げる(\square)ことをも、それは当然同時に含むことになる。



このように中央に寄せることを、Mid-centralizing を意味する diacritic の(母音記号の上に載せる)「x」は表現しているのではないかと筆者には思える。

そして、現在 IPA の表で例示されている[e̝]は、[u]から唇の丸めを除いたものに相当することがわかる。考えてみればこれには決まった一つの記号は特に割り当てられていなかった[※ 7]。

例を[e̞]から[e̝]に替えることで、IPA の例示はその意図するところが明瞭になったといえる。

「中央化」の記号[e̝]が中舌化[e̞]と区別しがたく思われたのは、[e]にそれを適用したからであった。中舌化[e̞]と中央化[e̝]は同じようなことである。いま、[a]の高さが[e]のそれと同じと仮定すると、中舌化[e̞](:=[e̞]、後ろに引かれた[e])は中央化[e̝]と選ぶところがないことになる。これが[e̞]（後ろへ引き、かつ高さを下げる）、[e̝]（前へ押し、かつ高さを下げる）、[ẽ̞]（高さを上げる）ならば事情は異なることになる。言い換えれば、中央化 $\overset{x}{\square}$ という「操作」は、出発点の音が何であるかによってその意味するところが変わることになる(この点は中舌化 $\overset{\cdot\cdot}{\square}$ も同じ)。

3. 「中央化」とシュヴァ

IPA は半狭[e]の高さにある「曖昧母音」を改めて[a̠]と書き、その円唇のパートナーを[a̠]と書くことにし、それとは別に[a̠]を(半狭と半広の間に)置こうとする。筆者に言わせればこれは IPA のかなり神経質な定義の仕方であって、要するに[a̠]には「積極的な特徴」を何一つ持たせなかったということであろう。[e]の高さ(半狭)でも[ε]の高さ(半広)でもなく、唇の丸めという特徴さえも(それのない相方、という形で逆に描き出されることさえも)けだし、嫌ったのである。しかしながら、[a̠]を厳密に半狭[e]の高さにあるものに限って考えることはかえって paper phonetics に陥ることにもなりかねない。[a̠]とは[a̠]に唇の丸めを加えたもの、とみておくことで十分誤解がなく、かつ有益であろう。

「半狭[e]の高さの中舌母音」を厳密に考えるとき[a̠]、半広[ε]の高さの中舌母音」を厳

密に考えるとき[ɜ]と書くこととし、[ə]、[ɜ]は(そして、円唇の変種[ø]なども))すべて[ə]の変種と考えておくのが穏やかであろうと思う。いまこれらシュヴァの諸変種をまとめてシュヴァ類、'schwoid'とでも呼んでおくことにしよう。シュヴァ類は、緩んでいない「張り」のカウンターパートを持たず、本来的に「緩んだ」位置にある。というより、シュヴァ類は、「緩み」がそれをいわば参照し目指すところの「方角」にあり、「目的地」であるともいえる。

4. 緩み母音の目録

ここではデフォルトの「張り母音」としての基幹母音それぞれについて、そこから出発した「緩み」のカウンターパートをみておくことにしよう。

【低(広)母音】ならば、前寄り[a]、中舌[A](この記号は正規の IPA にはないが、中国語学者たちがしばしば用いる)、後寄り[ɑ]に対して→[ɐ]。挙上である。

【mid-open】ならば、[ɛ]に対して→[ɛ̃]すなわち[ɜ]、[ɔ]に対して→[ɔ̃]すなわち[ø]ぐらいであろう。いずれも中舌化をもってこれに充てることができる。

【mid-close】なら、[e]に対して→[ə]、[o]に対して→[ø]を充てることができる。これも中舌化(前後への動き)である。

【高(狭)母音】については、

《前寄り》

[i]に対して→[ɪ](中舌化[後へ引く]+下げ)

[y]に対して→[ʏ](中舌化[後へ引く]+下げ)

《中舌》

[i]に対して→[ɨ](下げ)

[u]に対して→[ʉ](下げ)

《後寄り》

[u]に対して→[ʊ](中舌化[前へ押す]+下げ)

[ɯ]に対して→[ʊ̯](中舌化[前へ押す]+下げ)

これらの「操作」のセットについて考えておくことは、第9節において緩み母音の構成のためのドリル(練習方法)を設計する上で必要となる。

5. 「緩み母音」のある体系

ここで「緩み母音がある」というのは、「緩み母音音素」(「緩み」がその弁別的特徴の一つであるような母音音素)があるという意味では必ずしもない。「緩み」を関与的(音芯論的)特徴として持つ母音音素がある、ということですらない場合もある。しかし、レベルは様々であるにせよ「緩み」あるいはそれに似た何かを特徴として持つ音声が続り返し社会的な型として現れるのは事実であるような諸言語について概観しておくことは有意義であると考えるので、あえてここで一緒に扱ってみる。

5-1. 英語

Open [i:] [e ɪ] [ɑ:] [u:] [ə:] [o ʊ] [ɔ:]

Checked [ɪ] [ɛ] [æ] [ʊ] [ʌ] [ɒ]

英語(RP)の母音体系は一見非常に奇妙な形をしているが、実は《強勢のある音節とな
い音節に分ける》《open と checked に分ける》などの場合分けを施すと、「アイウエオ+シ
ュヴァ」の6母音体系に整理されることがわかる[※8]。

英語における「緩み母音」は、checked vowels のうちの[ɪ] および[ʊ]に現れる。さらに、
重母音の副母音において自由変異として[ɪ] と[ʊ]は 現れ(話者により単に非成節的で短
い i と u つまり[j] [w]のように現れることも多いようだ)、また強勢のない弱化した開音
節においてシュヴァの変種として[ɪ] が現れることがある。

5-2. ドイツ語

<a> <ä> <e> <ö> <i> <ü> <o> <u>

Open [a:] [ɛ:] [e:] [ø:] [i:] [y:] [o:] [u:] +[ə](<e>)

Checked [a] [ɛ] [ɐ] [œ] [ɪ] [ʏ] [ɔ] [ʊ]

ドイツ語における「緩み母音」は、checked vowels のうちの[ɪ]、[ʊ]および[ʏ]に現れ
る。さらに、重母音の副母音において[ɪ] (/a ɪ/) と[ʊ] (/a u/)および[ʏ] (/ɔ ʏ/)は 現れる(英
語の重母音におけるそれよりも緩み母音としての現れ方ははっきりしている)。

5-3. スウェーデン語

<a> <ä> <e> <ö> <i> <y> <o> <u> <å>

Open [a:] [ɛ:] [e:] [ø:] [i:] [y:] [u:] [ʉ:] [o:]

Checked [a] [ɛ] [ɐ] [œ] [ɪ] [ʏ] [ʊ] [ə] [ɔ]

<ä>と<e>は Checked の位置で中和するように思える。

	張り	緩み
<i>	[i:]	[ɪ]
<o>	[u:]	[ʊ]
<y>	[y:]	[ʏ]
<u>	[ʉ:]	[ə] (= [ʉ]) ⏟

<u>で書かれる open vowel が[ʉ:]で現れるのがスウェーデン語の大きな特色であると思
うが、その checked vowel のカウンターパートは[ə]に近いと記述されることがある[※9]。

Open [ʉ:] vs. Checked [ə]—このことは面白い示唆を与えてくれる。

これは、もしも中舌母音[i:]に「緩み」の相方があるとしたら、それは([ɪ]を「下げた」
[i̟], すなわち)[ə]だ、ということなのである。[ʉ]とは円唇化した[i]のことなのであ
つて、かつ、[ə]とは円唇化した[ə]のことだからである。

5-4. アフリカーンス

多くのゲルマン語で閉音節における「短い i」は[ɪ]で現れるが、アフリカーンスでは
それが[ə]で現れる(強勢のあるところでも)。これはアフリカーンスの「ひびき」に大き

な特色を与えている。

例) lig[l̥əx]光 mis[m̥ə s]霧 sin[s̥ə n] sing[s̥ə ŋ]歌う skip[sk̥ə p]船
sprinkaən[spr̥ə ŋ k̥v:n]バツタ、イナゴ drink[dr̥ə ŋ k]飲む

[i(:)]は<ie>で書かれる。drie[dri(:)]

考えてみれば、[i]を中央化した[ɨ]が[ɪ]なのだとすれば、中央化をさらに推し進めればそれはまさに[ə]に行き着くことになるわけである。[ə]とは「緩み」の究極の姿である。

「緩む」ということが「中央化」の一種だとするなら、「緩んだ」母音は一つの中央を目指して集まろうとするわけなので、突き詰めると互いの聴覚的距離を縮小する方向に進んでしまい、聴きわけが困難になってゆくことになる。「緊張した」母音とは、互いの間の聴覚的距離を保とうとする母音であるともいえるだろう。

5-5. ロシア語

ロシア語における[ɪ]は、主に軟子音の後の<е>や<и>の、強勢のないところで実現する。ロシア語の場合、強勢の前と後で母音の「弱化」の様相が異なることがあるので、両方のケースをみておく。

強勢の前の例：л е г к ó[ɫɪ xko:]「やさしい」

強勢の後の例：л é г ч е[ɫ e:xtʃɪ]「よりやさしく」

(いずれの例も城田俊(1993)『現代ロシア語文法』東洋書店刊、p.39 による。記号は引用者において少し変更した)

5-6. ベトナム語

ベトナム語の母音体系は、方言により音価に違いがあるかもしれないが、おおむね次のようにまとめられるだろう。

i	ư	u
ê	â/ơ	ô
e	o	
ă		
a		

音価はそれぞれ、大略 i[i]ư[i] u[u]ê[e]â[ə]ơ[ə:] ô[o]e[ɛ]o[o]ă[ə]a[a]のように考えてよからう。

ベトナム語の正書法ではアクセントマークは「挙上」を表すものの如くであって、êは狭い(高い)eを、ôは狭い(高い)oをそれぞれ表す[※ 10]。それからすると、âとは「aを高く挙げた(狭くした)もの」という意味にとれるが、[ə]の音価を持つものは<ă>の方で、âは[ə]ぐらいの高さのものである。なお、<ư>の音価が[i]であるということは、この補助記号は「中舌に寄せる」のか、(後寄り母音を)前進させるのか、どちらかであろう(実際、書くときに右上から左下に向かって斜めになるようだが、これが「左向き、つまり前寄り向き」を意識したものなのかどうかはわからない)。<ơ>はつまり「oの高さの中舌母音」の意味であることにならう。

緩み母音と呼べるものは â[ə]、ơ[ə:]、及びă[ə]である。何かが弱化したものというわ

けではなく、また、音節の主母音として声調も担う。

5-7.ムラブリ(ピートンルアン)語

Pookajorn et al.(1992)によれば、ムラブリ(Mlabri)語はモンクメール語族に属する極小言語である。Mlabri(mla ? bri ?)は自称で「森の人」、タイ語ではピートンルアン(Phi Tong Luang)と呼び、「黄色い葉の精霊」の意である。

『言語学大辞典』世界言語編「ムラブリ語」の項によれば話者は数十人程度であるという[※ 11]。

ストレスのある音節に現れる母音:

i	ɯ	u
e	ɤ	o
ɛ	ʌ	ɔ
a		

ストレスのないところに限り現れる母音があり、それらは高[i][ɯ][u]及び非高[ə]であって、筆者の考えではおそらくストレスのある音節における[i][ɯ][u]及び[ɤ]に対応するもので、ストレスのない音節ではiとeが[i]に、uとoが[u]に、合流するということではないかと思う。aやʌは[ə]に合流するのであろう[※ 12]。

すなわちストレスのない音節では、

	前	中	後
高	i	i	u
非高		ə	

という部分体系になる。部分体系といったのは、ストレスのある音節での

i	ɯ	u
	ɤ	

に相当する部分だからである。

5-8.タイ語

	前	中	後
高	i	ɯ	u
中	e	ə	o
低	ɛ	a	ɔ

それぞれに長短の別がある。

クメール語も基本的に似た体系を持っているように思う。この体系において「緩み母音」/ə/は、中舌(非前非後)でナカ(半高)の位置を埋めるものとなっている。これにより均整のとれた体系となっている。緊張しているか緩んでいるかが問題になる体系ではない。

5-9.ビルマ語

i		u
e	ə	o

ε ɔ

a

/ə/という音素があるといっていいのかどうかよくわからない。いずれ[a]は主たるアクセント(声調)を担わない、弱化した「軽声」の音節にしか現れない。「アクセント核のないところに現れる弱化した/a/」だと言ってもよいのかもしれない。

5-10 インドネシア語(ムラユ語)

i u
e ə o
a

かつての正書法では/e/をéと書き、/ə/を単にeと書き、区別していたが、現在では書き分けないもののようだ[※ 13]。機能負担量が小さいからなのか、どうか。マレーシア側の国語としてのマライ語では/e/を単にeと書き、/ə/はeにbreveを載せたëを書くようだ。

このシュヴァの起源はおそらくかなり古く、「何かが弱化した」ものではないように思われる。なお、同じアウストロネシア語でもタガログ語では/e/と/ə/の弁別はあいまいであり、はっきり別のものとして立てうるのかどうかも怪しい(u と o の機能負担量もおそらくは非常に小さく、元々はaiuəの4母音体系であったのではないかと筆者は思う)。ポリネシアの言語にはシュヴァはないようで、ハワイ語はaiueoの5母音体系になっている。

5-11. ルーマニア語

i â u
e o
ă
a

iのドットの代わりにアクサンシルコンフレックスを載せた文字îがあるが、âと同じものである所以ここでは統一する。ルーマニア語において「緩み」母音と呼べるのは<ă>であろう。これは強勢のないところにあった<a>にさかのぼるものがほとんどであろうと思われる。音価は[ɐ]ないし[ə]であろう。

5-12. 北京語

北京語の「主母音」となりうるものは次の3個とされている。

高 i
中 ə
低 a

/i/というのは「引き延ばし音素」と呼ばれ、多くの場合それ自体の音価を持たないが、s、sh、z、zh、c、chの後で単独で(介母iuüを持たずに)主母音として現れ、実際の音価は成節的な摩擦音だが、「中舌高母音」として振る舞う。

つまり「主母音」はすべて中舌母音からなっていることになる。これは極めて異様な外見を持つ体系(解釈)であるが、北京官話の音節構造をよく説明しうる便利なモデルである。

ここではシュヴァは何かが弱化したものではなく、相当に古い起源を持つ「主母音」である。なお、主母音/a i ə/, 介母/i u ü/以外に/e o/を別に立てるべきであるのか否かは筆者には未だよくわからない[※ 14]。

ところで、「緩み」の要素をまったく持たない母音体系もある。その例も挙げておこう。

(1) フィン語

前 後

高 ü u

半高 ö o

低 ä a

i、eの二つが中立。

(2) トルコ語

後 a ı o u

前 e i ö ü

中立母音はない。

「緩み母音がある」体系でもっともありふれたものは、「aiueo+シュヴァ」、「aiu+シュヴァ」など、シュヴァを持つ体系であろう。それも、「強勢のないところで弱化した母音として現れる」のではなく、通常の母音として、他の母音音素とかわりなく出現するようなものは典型的と言ってよいであろう。ブルガリア語は「硬音記号」<ъ>が[ə]の音価を持っており、強勢が乗ることもある。

6. 緩み母音の起源

母音体系の中での「緩み母音」は、それが「緩み母音音素」と呼べるものであるか否かは別として、どのような現れ方をし、どのような「起源」が想定されるであろうか。前節で見たところを承けて分類してみよう。

(1) Checked vowels の目録の中に生ずる。

現代のゲルマン語の多くにこれがみられる。

(2) 強勢のないところ、重母音の副母音などの”弱い”ところに、弱化した母音として生ずる。

ドイツ語においては重母音の副母音にこれがみられる。英語においては一部の強勢のない音節で現れ、多くの場合シュヴァに置き換えることができる。ロシア語では軟母音<е>が強勢のないところで弱化してこれが現れる。ムラブリ語における例も「弱化」であろう。

(3) 初めから「張り」vs.「緩み」の対立として現れるもの。

カクチケル語はこの例なのであろうか。いずれにせよ、あってもおかしくないことである。

(4) 何か別の対立のパラダイムがシフトしてきた。

これもありうるであろうが、筆者はいまその具体例を知らない。

7. 緩み母音と母音体系に関する二、三の問題

7-1. 中期朝鮮語

中期朝鮮語の母音体系を例にとってみる[※ 15]。

	前	中	後
高	ㅏ	ㅡ	ㅗ
低	ㅓ	ㅜ	ㅛ
	(中性 ㅓ)		

こう割り切って整理することにより、中期朝鮮語の母音調和の体系はよく説明される。調和の軸、男性(陽)母音 vs. 女性(陰)母音の対立は、低(広)vs. 高(狭)だったと考える。このモデルでは、ㅏはその音価 [a] であったと考える人が多数派であろうと思う。一はともかく、その音韻的位置づけは「前寄り高め母音音素」/e/ であった、と考えることになる(近藤(1990)(1998))。

ㅏ / の音価を *[a]、ㅓ / の音価を *[e] と推定するのはよいのであるが、問題なのはこれらが「緩み母音」であるという「音声学的」事実と音韻論上の意味との関係である。「緩み」がこれらの母音音素にとって弁別的(distinctive)なものであったとは思われない。関与的(relevant、服部四郎の用語。城生伯太郎の用語でいう「音芯論的」)ではあるかもしれないが。

「緩み」が、これらの母音音素にとって、またこれらが構成し属する母音体系にとって真に「何」であるのかは、音素の位置づけに、また逆に音価の推定にも、影響を与える可能性がある。

何が言いたいのかというと、ㅏ が実際に [a] であり、ㅓ が実際に [e] であったとしても、それらは「母音三角形(または、そこから中性母音 ㅓ を除外することでつくられる母音四角形)の辺をいっぱいに使った」《前寄り高め(陰)母音音素》であり《非前非後 [= 中舌] 低め(陽)母音音素》であるとすべきなのだ、ということである。「緩み」をこれら母音音素の特徴として盛り込むことに音韻論的意義は見出せない。

カクチケル語の場合はおそらくそうではないであろう。「緩み」ないしそれに似た特徴は、母音音素の弁別的な特徴とみることができるし、(音価がどうであれ)そうしなければならないであろう。

ところで上で述べたようにㅏの音価が [a] であったとみる研究者は多く、またそれが(現代語の音価から考えても)ありそうであつ自然なことだとも思うが、そうすると：

	前	中	後
陰	ㅏ [a]	ㅡ [i]	ㅗ [u]
	vs.	vs.	vs.
陽	ㅓ [a]	ㅜ [e]	ㅛ [o]

[e] は [æ] と同じぐらいの高さの母音なので [a] よりは広い。だから [a] と [a]、[e] と [i] は、低対高の関係にはなっているが、[a] は [e] を飛び越えて [a] と、[e] は [a] を飛び越えて [i] と、調和のカウンターパートになっていることになる。つまり、あたかも「遠交近攻」のように入り組んでいることになる。高低の対立の体系であるなら、なぜ素直に [a] vs. [e]、

[ə]vs.[i]といった、直近の母音との関係を結ばないのか?

かような「・」の位置づけの問題は[v]という音価の推定にも再考を求めるかもしれない。すなわち、「緩み」の要素の別でない(「張母音」の)[ʌ]を代わりに考えるとき、上で見た「遠交近攻」は解消される可能性がある。つまりこの「問題」は、そもそも見かけ上のものに過ぎなかったのかもしれないのである。そして・について音価[ʌ]を指定することは済州方言における「・」の反映から十分有り得ることであり、実際、そういう立場をとる研究者はかつて今もある。

7-2.母音体系の理論的構造

カクチケル語の場合は「緩み」は—その実体が実はどうなのであれ—母音音素の弁別的特徴としてみることができようし、音価がどうであれそうみなければならぬであろう。

張母音 <a> <i> <u> <e> <o>

緩母音 <ä> <î> <û> <ê> <ô>

もしかすると、「緩み」のかわりに何らかの非デフォルト化(有標化)をもって替えるようなバリエントがありうるのかもしれない。i に対して y、u に対して w、o に対して x、など(つまり第1次に対する第2次基幹母音と同じこと)。

「張り」がデフォルトの母音の特徴であるとするなら(基幹母音はそもそもすべてそうである)、「緩み」母音は有標である。いずれ弁別できればそれでよいのならば、<a>vs.<ä>が[a]vs.[æ]、<i>vs.<î>が[i]vs.[y]であつてもよいわけなのだ。あるいは[a]vs.[ã]とかであつてもよいであろう。ナバホ語[※ 16]の鼻母音音素が、かりに、かつて鼻子音が近くにあったことから同化されて生じたというわけのものではなくて、もともとそういうものであるのだと、かりに、したなら、それは母音体系全体の、系列同士の、対立のありかたをめぐるパラダイムの選択とかシフトとかいったものによるものなのかもしれないのである。

そう考えるならば、ヨルバ語[※ 17]の鼻母音系列にしても、かつて母音(口母音)の前後に n や m が存在したのだと考える必要がないのかもしれないわけである。ヨルバ語はもともと開音節のみをもち(つまり*-n、*-m といった末位子音を持つ音節をもっていたわけではなく)、かつ鼻母音系列をもつ、ような言語であつたかもしれないのだ。

われわれのよく知っている言語(フランス語、ポルトガル語など)において、鼻母音が口母音+鼻子音から生じ、その生じた経緯が明らかになっていることをもって、鼻母音の来歴は V+_n, m, ŋ などであると—つまり「あとから生じた」ものであると—決めてかかることはできない。

実際、ある言語について、その母音体系が、

口母音 <a> <i> <u> <e> <o>

鼻母音 <ã> <ĩ> <ũ> <ẽ> <õ>

咽頭化 <á> <í> <ú> <é> <ó>(綴りは便宜上のもの)

の15母音体系のようなものであつて、しかもそれがもともとそうであるようなものであつて、何かいけな理由があるであろうか。

しかし実際にはこのような体系は比較的希であろうし、だとすれば、もしかしたら、

なにゆえに希であるのか説明されなければならないような事柄なのかもしれない[※18]。

8. カクチケル語再考

カクチケル語の母音体系について改めて考え直してみよう。

張母音<a><i><u><e><o>と緩母音<ä><i><ü><ë><ö>、この 10 母音(5 × 2)体系は、もし「張り」と「緩み」の対立を額面通り考えると、たとえば、

<a>[a] vs. <ä>[ɐ] (:=[⌘][ä])

<i>[i] vs. <i>[ɪ] (:=[⌘][i])

<u>[u] vs. <ü>[ʊ] (:=[⌘][u])

<e>[e] vs. <ë>[ɛ]=[⌘][ë] ⇌ [ə]

<o>[o] vs. <ö>[ɔ]=[⌘][ö] ⇌ [ə]

のようになりうるのであろうが、実際にはそのようではなく、Brown, Maxwell, Little (2006) によれば<ä>[ə]、<ë>[ɛ]、<ö>[ɔ]であるごとくである[※19]。

しかし<ë>、<ö>が「緩み」母音の仲間であると話者自身によって意識されているのだとすれば、これは説明を要する事由というべきである。

実のところ、[ɛ]と[ɔ] (ゲルマン語の ɔ、つまり[ɔ]～[œ]のことだと思ってはいけない。[ɔ]とは[ɔ̥]のことである)とは、額面通り受け取って突き詰めると[ə]と[e]となってしまう、聴覚的距離を保つのが難しくなる。<ë>が「緩みの e」であると意識されているということは、

- ・張りの<e>とペアをなすものであること(すなわち「張りのeに対して何かが異なる」のでなければならない)。それは<a>に対して<ä>の、<i>に対して<i>の、何が異なるのか、ということと平行していることが期待される。

- ・張りのeが他の張母音とそれによって弁別されているところの特徴は、「緩みのe」<ë>と他の緩み母音がそれによって弁別されているところの特徴と平行していることが期待される。

—はずであろう。少なくともこれをありそうなことと考えるのは合理的な類推であろう。

そうであるとする、<ä>が[ə]に近いところまで「上がって」来ているのが事実であるとする、<ë>が[ɛ]、<ö>が[ɔ]であったなら(前寄りから順に)<ë><ä><ö>の三者は互いに近すぎて不便なのだ。

<a>と<ä>が互いのカウンターパートであり、<e>と<ë>の関係がまたそうであるべきであるなら、<e>と<ë>がまずは「張り対緩み」に似た対照をなしているべきであり、またそれであれば十分であるはずである。かくて<ë>は実際の音価において「やや下がった」(だけの?) [ɛ]で実現されている、ということではないか[※20]。

[e]の緩んだ[⌘][ɛ]のかわりに[ɛ]があり、[o]の緩んだ[⌘][ɔ]のかわりに[ɔ]がある、ことになっているというこのこと、これを、しかし、「[ə]のあるところ(中央)に向かって緩む」ことを目指していると考えるとどうなるだろう。

[ɛ][ɔ]を「張り」の<e><o>に対する「緩み」のカウンターパートとして用いている、のだとすれば、それは、いわば「中舌化を省略(あるいは捨象・無視)」したというこ

となのかもしれない。

9. 緩み母音の構成ドリルについて

緩み母音を構成する手順を考えてみよう。「構成」とは、音の「出し方」を考え、設計することである。ある言語音について、いかにその音を作り出すかを考え、その観点から音声学の体系を改めて書いてゆく立場を筆者は調音音声学の「構成的立場」(constructivist approach)と呼び、提唱した(近藤(1992))。この立場においては音の「作り方」を示し、練習する方法を与えることが重要である。この練習手順を構成ドリルと呼ぶ[※21]。

第1節でみたように、ギムスンや竹林は英語の /ɪ/ について [ē] と同じことであると言っている。これは「[e] (よりもわずかに狭い) ぐらいの高さで中舌寄り (少し後ろに引かれている)」という意味である。「[e]」によって言いたいことは「[i] よりも少し低い」ということであり、中舌化した [i] = [i̠] とは「少し後ろに引かれた [i]」= [i̠] である。

[i] を少し下げ ([i̠] ⇌ [e])、かつ少し後ろに引く ([e̠])、というのが、「[ɪ] = [ē]」の意味である。

同様に [u] についても [ö] と書くことができる。[u] を少し下げ ([u̠] ⇌ [o])、かつ少し前に出す ([o̠])、というのがその意味である。

そこで「緩み母音」のドリルを作る方法がわかる。

(イ) 水平(前後)ドリル (Horizontal drill)

[i̠] = [i] (前寄り母音の後退)

[i̠] = [i] (中舌母音の前進)

[u̠] = [u] (後寄り母音の前進)

[u̠] = [u] (中舌母音の後退)

(ロ) 垂直(高低)ドリル (Vertical drill)

[i̠] = [e] (高母音を下げる)

[e̠] = [i] (半狭母音を上げる)

[u̠] = [o] (高母音を下げる)

[o̠] = [u] (半狭母音を上げる)

そして、以上を十分に訓練した上で、

[i̠] = [e] (高母音を下げる)

[e̠] ⇌ [ɪ] (半狭母音の後退)

[u̠] = [o] (高母音を下げる)

[o̠] ⇌ [ʊ] (半狭母音の前進)

このように作られる。

すなわち、

[i] から出発して [ɪ] を

[u] から出発して [ʊ] を

作るのに、「下げ」 + 「中舌化」を行っていることになる。なお、「下げ」の操作と「中

舌化」の操作の順番を入れ替えても結果に変わりはない。

結論－「緩み」とは「中央化」である－

以上みてきたところによれば、「緩み」は「ある」。

それは「母音三角形の辺をいっぱいに使って」調音されておらず、「中央に寄っている」という形で投影され、現れる。その意味で[ə]のたぐいは本来的に (by nature) 「緩んだ」母音であると言える。

筋肉あるいは調音器官の…とか音波の…「弛緩」について述べるのではなく、母音三角形への投影という直観的なガジェットを用いたところ、「緩み」(lax)という用語が(図形的な意味からも)そのまま使えたことになる。

《緩みとは中央化の一種である》といえよう。

この定義は：

(イ)「緩み母音」とされる[i][y][u]のすべてにあてはまり、かつ、

(ロ)いわゆる checked vowels のうち、誤ってそこに入れられることのある[ɛ][ɔ][æ][ʌ]

を正しく排除する。そして、

(ハ)シュヴァを新たに「本来的緩み母音」と位置づける。

これはすなわち「緩み」の構成的再定義である。

注

※1：以下では書記素 (grapheme) を<>を用いて表記することにする。

※2：ロルマイ・ペドロ・ガルシア、大森裕巳、八杉佳穂、小泉政利(2012)p.74；Brown, R. McKenna/ Maxwell, Judith M./ Little, Walter E.(2006)が依拠しているのも10母音バリエーションである。同書ではSan José Poaquil以外の多くのカクチケルコミュニティでは<ë>が見られないと言っている(p.10)。

※3：本稿執筆時点で音声資料が入手できなかったため、筆者はカクチケル語の音声を実際には耳で聴いて観察することを得なかった。従って本稿においてカクチケル語の音韻について述べることはMcKenna et al.などによって知り得たことをもとにした推測であることをお断りする。

※4：「休息の位置」がその話者の発声器官の「デフォルトの位置」のことなのだとすれば、筆者はそれを「ホームポジション」と呼んだことがある(近藤(2008)p.133)。「発話のとき、いつもそこから始まり、気がつくとまたそこに帰る、無意識の「構え」、定位置のようなもの」(同)。ここではシュヴァのような「高くも低くもなく、前でも後ろでもない」位置とは限らず、個々人の癖によって様々な位置を取っていると考えたので、同辞典に言う「休息の位置」とはまったく同じものではないのかもしれない。筆者は近藤(2008)のために様々な(「モノマネ」の対象となる有名人たちの)「ホームポジション」の分析例を用意したが、最終的に本文では使われず、また同書以降筆者はこの問題を続けて扱わなかったため、「ホームポジション」(すなわち、個人の音声的特徴の調音音声学的記述の指標の一つとしての)の考察はその後それ以上の発展を見ることはなかったが、法言語学(forensic linguistics)の問題としても扱われうるのではないかと、裁判員制度の施行を控えていた当時は考えもしたものである。

※5：読み方は「ナカ・チュウゼツヨリ」であろう。

※6：IPAは1993年の改訂(revision)の後、1996年に小さな訂正(correction)を経て、2005年の最新版(現在)に至っているということなので(*International Phonetic Alphabet - Wikipedia, the free encyclopedia*、及び「国際音声記号 - Wikipedia」による)、「2005年に」修正されたと考えてもよさそうである。この時までにはIPAの「中の人」はこの問題に気付いたのである。

※7：緩みの後舌高母音[u]をスモールキャピタルのUを用いて書くこともあるところ、後舌高母音[u]から唇の丸めを取り除いた母音に対応する記号が[ɯ]なのであってみれば、ɯの文字がturned mなのだとすれば「スモールキャピタルのMを上下転倒したもの」をもってこれに充当することも考えられる。もっとも、その記号は「w」と紛らわしい外見を呈するであろう。キリル文字ɯを転用すると外見上はよりましなものになるかもしれない(ɯすなわちɤとは音の上で何の関わりもないので、抵抗がある人も多いであろうと思わ

れるが)。

※ 8：英語の母音が「アイウエオ+シュヴァ」なのだとすると、5 母音体系を持つ日本語を母語とする者がこれを近似しようと(たとえば、「カナに置き換えようと」)するとき問題となるのがシュヴァの処遇、その位置づけ、であるということになる。強勢のないところでの[ə]は、もとの綴りが<e>ならばエで、<o>ならばオで、写しておき、後はおおむねアをもって写す、などとして大きな差し支えもあるまい。強勢のある閉音節の[ʌ]の扱いは、しかし、問題となる。これは何を意味するのかということ、日本の生徒に英語を教えようとするとき、/ʌ/こそがもっとも注意を要するポイントだということである。日本語の側に代替すべきものがないのだからだ。極端に言えば、

a-i-u-e-o-{ʌ}

ä-ī-ū-ē-ō-{ə}

(反り舌なし)、このような近似であっても(区別すべきものが区別できているとすれば)十分了解可能なものになるであろう(欠点は、[o u]<oa>/<oCe>と [o:]<aw>の区別がこれだけではつけがたいことである)。

※ 9：尾崎義編(1982)『スウェーデン語基礎 1500 語』(大学書林)[以下「旧版 1500 語」]では checked の<u>を[u]、open のそれを[ɯ:]としている；菅原邦城・Claes Garlén 編(1987;2007 年 4 版)『スウェーデン語基礎 1500 語』(大学書林)[以下「新版 1500 語」]では checked の<u>を[ø]、open のそれを[u:]とする；速水望(2007)『ニューエクスプレススウェーデン語』(白水社)では、checked の<u>を[ø]、open のそれを[ɯ:]とする。菅原・Garlén による「新版 1500 語」の記述を本文では採用した。open の<u>を中舌母音[u]の記号を正しく用いて表記する点([ɯ]の記号をもって一非円唇後高母音ではなく一中舌高母音[i]の代わりとする習慣が一部にあることについては前号の拙稿「サンスクリット第 7 母音の本質について」注 17(p13-14)に述べた)、またその checked のカウンターパートを[ø]と観察する点([u:]が中舌高母音であるので、その「緩み」の相方は当然、シュヴァに向かって下がる。[u:]は円唇母音であるので、シュヴァの辺りまで下がればそれは当然円唇のシュヴァ、すなわち[ø]となる)が理にかなっており優れていると思うからである。；ところでスウェーデン語の今ひとつの特色は、<o>をもって/u:/(open)と/ø/(checked)を代表させることである。「旧版 1500 語」では checked の<o>を[u]、open のそれを[u:]としている。「新版 1500 語」では checked の<o>を[u]、open のそれを[u:]とする。『ニューエクスプレススウェーデン語』では、checked の<o>を[u]、open のそれを[u:]とする。本稿ではやはり「新版 1500 語」の記述を採った。checked が緩み、open が張りであるのは体系の均整の上で理に適っているように思われる。しかし、旧版「1500 語」の著者である尾崎義および田中三千夫・下村誠二・武田龍夫編(1990)『スウェーデン語辞典』(大学書林)では<o>の open を[u:]としているが、わざわざ記号の方便である旨断っている。open の<o>にも緩み[u:]の音色があると尾崎は観察したのであろうか。

※ 10：アクサンシルコンフлексで「狭い方の母音」を表す方式は、上に向けて尖った記号を「上向き矢印」のつもりで用いているということではないかと思う。ところがア

フリカーンス正書法ではこれが逆であり、êの方が「広いe」[ɛ]を表す。ツワナ語正書法はこれをさらに拡張したもので、ôが「広いo」[ɔ]を表すのに用いられている。

※ 11：『言語学大辞典』第4巻世界言語編下-2(1992、三省堂)「ムラブリ語」の項(p.363、坂本恭章)。

※ 12：ムラブリ語にはクメール語にはない生産的な接辞がある(接頭辞だけでなく接中辞もある)。そこにはアクセントがなく(「軽声」ということであろう)、主たるアクセント(アクセント核)は後ろの音節にある。[ɪ][i][u][ə]はそのようなアクセントのない従属的な音節にのみ現れる。例)[1]動詞化接頭辞(Pookajorn et al.(1992)p.51)k u- n o m 乳房・胸→k u n o m(乳を)吸う;完了接頭辞(同 p.51)?ə- w ʌ l 戻る→?ə w ʌ l すでに戻っている;名詞化接中辞(同 p.51)-ə r- kwac 掃く→k ə rwac 箒。こうしたものはクメール語では分析的に表され、たとえば動詞(次の例では aoi「与える」)を助動詞的に用いる。baw 吸う aoi ko:n baw d o h 子ども(ko:n)に乳を(d o h)飲ませる(ペン・セタリン『クメール語入門』連合出版、p.128)。ちなみにクメール語は孤立語でありながら弁別的な声調を持っていない。

※ 13：インドネシア語の正書法の新旧の違いはあらまし次のようである。

旧	新
é	e
tj	c
dj	j
j	y

(旧) Djé pang 「日本」→(新) Jepang

※ 14：「注音符号」(注音字母)は/e/と/o/の存在を想定して造られているように思う。いわゆる「ピンイン」(pinyin、漢語拼音方案)については、文字上の相補分布などを利用した複雑なものであり、e や o の文字を用いて書かれているからといって、それが音韻論的にどう解釈されているかについては簡単にはいえない。

※ 15：近藤(1990)において筆者は「Yale 式改」と称し、次のような転写法を用いていた。

ㅏ a ㅑ e ㅓ o ㅜ u ㅡ u ㅣ i ㅚ e

現在はこの方法を採らず、単に「大韓民国文教科 59 年式」によって

ㅏ a ㅑ eo ㅓ o ㅜ u ㅡ eu ㅣ i

とし、ㅚ については類推によって「ea」(なお、ㅓ は z で写す)と書くことにしている。補助記号を用いずに 転写することができる点で「59 年式」は優れていると考えるからである。ㅑ を eo と表記するのはおそらく「o に似たもの、もうひとつの o」の意味であって、ㅑ の現在の音価[ɔ]から来るものであるが、転写の目的が達せられるのであれば筆者の考える中期語の体系での位置づけと食い違っていたとしても別に構わないと今では思っている。なお、2000 年の「新文教科式」は同じ文字を頭位で g-、パッチム(末位)で-k と写し分けるなど、1 音 1 字から逸脱しており、改悪と考える。59 年式は頭位と中位

のリウル(ri-'eul)を r-、末位のそれを-l で写す以外、厳密に同じ字母を同じローマ字で写す原則を守っている。

※ 16 : Irvy W. Goossen(1995): *Diné Bizaad: Speak, Read, Write Navajo*, Salina Bookshelf, Inc., Flagstaff, Arizona ; ナバホ語の鼻母音はティルデ(◌̃)ではなく Polish hook(◌̣)で表される。

※ 17 : 塩田勝彦(2011)『ヨルバ語入門』、大阪大学出版会 ; ヨルバ語の鼻母音は音節末に-n を書き加えることで表される。フレンチクレオール(ハイチ、グアドループなど)も同様の書き方をする。フレンチクレオールでは語が子音の[n]で終わることを示すのに、もう一つ n を書き加える。ヨルバ語にはそれは必要ない。

※ 18 : フランス語のように、鼻母音の目録は口母音のそれよりも小さくなっていることもある(逆はおそらくないか、あっても極めて希であろう)。カクチケル語においても、緩み母音の方が張り母音よりも少ないバリエーションはあるが、その逆は知られていない(ロルマイ・ペドロ・ガルシア、大森裕巳、八杉佳穂、小泉政利(2012)、p.74)。

※ 19 : Brown, Maxwell, Little(2006)p.9 に<ä>について"Frequent variant is schwa, the central lax vowel of English in words like about, up, and umbrella."; p.10 で<ë>について"Like the English vowel in bet, pep, and west.";同ページに<ö>について"Like the English vowels in bought, caught, all, fall."; <i>と<ü>についてはそれぞれ、"Like vowels in sit, kiss, and kid."(p.10)、"Like the English vowels in put, book, pull, and should."(p.11)とあり、それぞれ本当に"lax"の[i]、[u]に相当するのは間違いなさそうである。

※ 20 : これは英語において「緩み母音」と格別「緩んで」はいない[ɛ][ɔ]がともに Checked vowels の目録に入れられていることについて示唆的ではなかろうか。ところで英語の[ʌ]の場合は第二次基幹母音のそれ(半広の[ɔ]より唇の丸めを取り去ったもの)とおそらく厳密には同じでなく、話者・方言差にもよるであろうがやや中舌寄りであるかもしれない。すなわち、英語の[ʌ]の場合は本当に「緩み母音」であるのかもしれない。英語の[ʌ]がシュヴァ音素の変種(強勢のある閉音節にのみ現れる)であることを思えば、シュヴァを「下げた」位置-[e]に近いが、多分それよりは少しだけ高い(というのは、[e]は[æ]と同じぐらいの高さの母音であり、[æ]は半広母音[ɛ]よりも、従って基幹母音としての[ɔ]と[ʌ]よりも、少し広い(低い)のだからである)ーありそうなことである。

※ 21 : 「構成的立場」とは、音の作り方を考える言語学(教育)工学であるわけであるが、それはある音から出発して目的の音に至る「手順のセット」を与える方法でもある。この「手順」をいまた例えば母音について、「挙上」◌̣、「下げる」◌̣、前進させる◌̣、後退させる◌̣、などの「操作(operation)」つまり「演算(operation)」に分解できるものと考ええると、手順の構成とは、ある音から出発して目的の音に至るための「演算の組」を求める方程式を解くことである、ともいえる。

参考文献

- 今井邦彦(2007):『ファンダメンタル音声学』,ひつじ書房.
- A.C.ギムスン/竹林滋訳(1983):『ギムスン英語音声学入門』(金星堂).
- 近藤清兄(1990):朝鮮祖語における*y_v(iotated aray-a)～「狐」を意味する語を中心に～,
『文化』54巻1・2号pp. 43-57, 東北大学文学研究会, 仙台市.
- 近藤清兄(1992): 調音音声学における構成的立場について,
『東北大学文学部日本語学科論集一言語学・国語学・日本語教育学一』第2号,
東北大学文学部日本語学科, 仙台市.
- 近藤清兄(1993): くちむろ同化と固有母音,
『聖霊女子短期大学紀要』第21号, 聖霊女子短期大学, 秋田市, pp.63-69.
- 近藤清兄(1998):朝鮮語の母音体系と母音調和の変遷,
朝鮮学会第49回大会(平成10年10月、天理大学)における口頭発表.
- 近藤清兄(2008):『5分でできるト定番モノマネ100－
「音声学」で学ぶモノマネのコツ－』,小学館.
- 城生佰太郎、福盛貴弘、斎藤純男(2011):『音声学基本事典』,勉強出版.
- 竹林滋・斎藤弘子(2008)『新装版 英語音声学入門』,大修館書店.
- 田中春美 et al.(eds)(1988):『現代言語学辞典』,成美堂.
- デイヴィッド・クリスタル著、風間喜代三・長谷川欣佑監訳(1992)『言語学百科事典』(*The Cambridge Encyclopedia of Language*), 大修館書店.
- デュシェ,ジャン＝ルイ、鳥井正文・川口裕司訳(1995):『音韻論』,白水社.
- 日本音聲學會[編](1976):『音聲學大辞典』,三修社.
- ピーター・ラディフォギッド/竹林滋・牧野武彦共訳(1999):『音声学概説』(大修館書店).
- ピーター・ローチ/島岡 丘、三浦 弘訳(1996):『英語音声学・音韻論』(大修館書店).
- ロルマイ・ペドロ・ガルシア、大森裕巳、八杉佳穂、小泉政利(2012):
マヤ諸語の標準語化:カクチケル語の場合,
『東北大学言語学論集』第21号, 東北大学言語学研究会, 仙台市.

Brown, R. McKenna/ Maxwell, Judith M./ Little, Walter E.(2006): ¿La ütʔ awäch? Introduction to Kaqchikel Maya Language, University of Texas Press, Austin,TX.

Pookajorn, Surin and staff(1992): The Phi Tong Luang(Mlabri): A Hunter-Gatherer Group in Thailand, Odeon Store, Bangkok.

【Web リソース】

International Phonetic Alphabet - Wikipedia, the free encyclopedia

http://en.wikipedia.org/wiki/International_Phonetic_Alphabet

国際音声記号 - Wikipedia

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E9%9F%B3%E5%A3%B0%E8%A8%98%E5%8F%B7>

Diacritic - Wikipedia, the free encyclopedia

<http://en.wikipedia.org/wiki/Diacritic>

国際音声記号の文字一覧 - Wikipedia

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E9%9F%B3%E5%A3%B0%E8%A8%98%E5%8F%B7%E3%81%AE%E6%96%87%E5%AD%97%E4%B8%80%E8%A6%A7>

(こんどう・すがえ 聖霊女子短期大学生生活文化科講師)

Laxity vs. Mid-centralizing

Sugaye KONDO